

ブータン王国 農村見聞記



馬場宗雄

(オーガニックファーム種子島主幹・
日本島嶼学会会員)

アジア太平洋農耕文化の会恒例の農村交流団の今年度の訪問先は、ブータンでした。その報告を今回はじめて参加された馬場宗雄氏にお願いしました。

1 はじめに

私は、平成13年10月24日から11月2日までの10日間、「アジア・太平洋農耕文化交流団」の一員としてブータンを旅し、この国の伝統文化、生活、農業についてそれこそ駆け足でみてきたので、特に農村見聞を中心にして、その概要を報告したいと思う。

ブータンといっても、ぱっと地図上のイメージのわく人は、少ないようである。私も、20年前NHKのテレビでブータンを紹介した番組を見るまでは、そうであった。数字の数え方で、12、13、14という発音が、日本語とまったく同じに聞こえたことが、強く印象に残っており、それに顔つきも日本人そっくりで、衣装も日本の着物によく似ている。そのころから一度この国へ行ってみたいと思っていたところ、図らずも今回実現したわけである。

ブータンの国の位置は、インドの北東、ネパールの東、ヒマラヤ山脈の南の麓といえ、おうよそ見当がつくであろう。ブータンの古代史については、ほとんど知られていないが、おそらく4000年前には、人が定住していたとされている。6世紀から7世紀にかけてチベット仏教圏に組み込まれたが、その後は弾圧と戦乱、チベット軍や蒙古軍の侵入などが続き、1907年ようやくウゲン・ワンチェックという人が独立を宣言し、王位につく。

現在は、四代目の国王であり、まだ若い。1974年16歳で後を継いだというから、今43歳である。昭和天皇の大喪の儀、皇太子の立太子の礼に来日するなど、親日家である。前国王の政策を踏襲しているのであるが、基本方針は、GNP〔国民総生産〕よりもGNH〔国民の幸福と総福祉〕を重視し、けして専制君主といった雰囲気ではない。

国の広さは、47、000平方キロで、種子島の広さが453平方キロであるから、おうよそ種子島の100倍あまりの広さの国である。人口は160万あまりで、鹿児島県のそれと、ほぼ同じということになる。

産業は、ほとんどが農業で、食料は自給自足の国である。工業製品は、ほとんどがインドからの輸入で、電気をインドに輸出している。

2 旅の経路

関西空港からタイ航空でバンコクへ行き、インド航空に乗り換えてカルカッタまでいく。そこで今度は、インド地方航空に乗り換えて、シグルリルという町まで行く。ここはインドの北東部に位置する標高200メートルの町であり、インド軍の要衝の地でもある。ここの空港には、地下弾薬庫らしいのが数カ所目に付いた。そこから標高1400メートルの平原まで山越えをする。この平原が、水田とお茶で名高いインドアッサム地方である。ここから北へ約2時間走って、いよいよ国境の町プンツォリンへ着く。

3 国境の町プンツォリンから首都ティンブーへ

朝食前に、国境に建ってあるゲート付近を見て回った。手前がブータン側、向こう側がインドである。ブータンの人もインドの人も、自由に行き来している。インド側では、ここがバスの発着所らしく、出発前のバスが3台ばかりいた。バスの屋上には、乗客と思われる人たちが、はやくも荷物をくくりつけていた。何台かの屋台も出ており、ミルクや紅茶を飲んだり、朝食をとっている人もいた。バナナや砂糖きびを売っている店もある。そこへ黒牛が紛れ込んできた。日本であれば、店の人があわてて追っ払うところであるが、ここの人たちは、野菜くずなどを拾い集めて牛に食べさせている。まさに人と動物の共生である。バスを待っているらしいサリーをつけた、肉体美の中年の女性がいたので、望遠で撮ったが光線の具合でうまくゆかなかった。同宿者の唐木田氏(75歳)は、撮らせてくれと頼んでみたが、あっさりと断られた、とホテルに帰ってから言っていた。

標高1400メートルのプンツォリンから2400メートルのティンブーまでの出発は午前の9時30分、

距離にして170キロメートル、通常は6時間かかるという。山越えに山越えをしていく。初めのうちはその山を数えていたが、面倒くさくなってやめてしまった。途中ツルハシとスコップを使って、道路の補修工事をしているところを何か所か見た。4、5歳くらいの子供を連れてきている人もいて、子供は近くで、仕事の邪魔にならないように遊んでいる。幅70センチから80センチ、奥行き150センチ、深さが20センチくらいの容器にコールタールを火をたいて溶かし、そこへ砂をいれて混ぜているところをみた。昭和20年代の日本の道路工事を思い出す。大規模な土砂崩れの現場が一か所あったが、さすがにここでは、大型のブルドーザーで仕事をしている。45度以上はあろうと思われる傾斜面に、直径1メートルもある石がごろごろしている、今にも転げ落ちそうだ。その下をバスは、ブルドーザーをよけながら行くのである。注意や警告の標識はない。日本では通行禁止必至である。迂回路がないからやむをえないであろうが、それにしてもおうらかというか、ものにこだわらない、こせこせしない民族性のようなものを感じた。これはインドも同じである。

この経路は、相当に急峻な山また山であるので、水田は少ない。それでも山の傾斜面を切り開き中腹以上のところまで棚田がある。水は天水と山から流れてくる自然水である。道路沿いにいくつかの出作小屋を見た。家から田圃までが遠いので田植え、刈り入れの忙しい時期に、この小屋に何日か泊り込んで仕事をするのである。これは昔の日本にもあった。ティンブーに着いたのは、午後の5時過ぎ、そのままホテルに入った。結局8時間以上かかっている。

4 首都ティンブー郊外の農村

午前中、弓道場、市場、博物館などを見学し、昼から

国境の大門、ブンツェリンの町



郊外の農村をみて回ったのであるが、ここでは農村見学について記す。

ブータンの低地の水田は、川をはさんで谷間に拓けているわけだが、片方の山は傾斜が緩やかで、ここに棚田が拓いてある。片方の山ははかかなり急峻で、この麓に農家がある。ブータンの農家は、大部分が二階建てで一階は納戸、穀物庫、道具置き場、収穫物置き場になっており、その横に家畜小屋、干草などの飼料置き場、物置などがある。二階がカマド、台所、食堂、寝室、居間、仏間というようになっており、田の字型に部屋が仕切られている。仏間だけは、履物を脱がなければいけないが、その他の部屋は履いたままでよい。

偶然、稲こぎをしているところが見つかったので、みんなでそこへ行って、見たり聞いたりした。こいつらは何者だというような顔つきで、歓迎してくれた。中年になるうかという夫婦の田圃で、友達とか知人が加勢にきているところだという。小積にしてある稲を直径15センチぐらいの束にして、それをシーとにたたきつけて脱穀している。刈って二日間干して小積みにし、それから一週間すると穂が落ちやすい状態になる、今日がその日だという。この小積みは、昭和20年代まで種子島にもあった。それとまったく同じである。加勢にきた人たちには、昼食をご馳走し、夜はご馳走するときもあればしないときもある。しないときは、夕食分の米(粳)を持たせる、のだと言う。どのくらい田圃を作っているのかと聞くと、夫婦二人で鋤で耕すと、一週間かかる、耕耘機でやれば一日ですむ、そんな広さであると答える。これは、面白い表現だと、感心した。それでは、どのくらい米がとれるのかと聞くと、種子用と自家用を残して、後は市場にもって行って売るくらいだという。市場ではどのくらい米を売るのか、聞こうと思ったが、しつこくて嫌がられるのではないかと考えてやめにした。われわれの言う広さとか、重さといった概念がないようである。11月になると、田圃を起こして小麦を播く、といていた。

日中は直射光がきつく、汗ばむほどであるが、朝夕はかなり冷える。ブータンのホテルは日本のように、全館暖房ではない。各部屋にポータブルの暖房機が置いてあって、これにスイッチを入れて暖をとるのである。コンセントは全部220ボルトで、日本の電気製品はつかえない。このことは、前もって旅行会社から知らされていたので、電気剃刀などは持って行かなかった。日本のホテルと同じように、バスとトイレが同じ部屋にある。バスは、お湯と水を適当に出すのであるが、コックの隙間から熱い蒸気が噴き出したり、かな

り物騒であった。

インドのホテルには、湯沸し器やミネラルウォーターが置いてあったが、ブータンではそれがなく、ローソクとマッチが置いてある。時々停電するらしい。しかし、ティンブー滞在中、停電は一度もなかった。粉茶をもって行ったので、ミネラルウォーターを買ってきて、溶かして飲んだ。

5ヒマラヤの遠望とプナカの農村

29日はプナカへ行く。この町は、標高1400メートルでティンブーよりも1000メートルも低い。片道3時間という。途中3000メートルのドチュラという峠で、雪を被ったヒマラヤの一部を眺める。このときはみんな感激し、バスの中でおのずと拍手が起こった。生まれてはじめて眺めるヒマラヤである。ただ、ただ眺める。

ここからは、くねくね道の下り坂である。少し下ったところで、柿を売っている少女がいたので途中下車、みんな柿を買って食べる。日本の富有柿の形、大きさである。日本円で、1個12円50銭である。この少女は、小学5年生だという。ブータンは、小学校も中学校も義務教育ではない。家は農家で家業を継ぐのだといていた。ブータンは、母系社会で、女の家が婿入りしてくる。離婚すれば男が出て行くのである。この少女もやがて婿をとって、農業をするのであろう。日本の少女そっくりの可愛い子である。この写真の後方が、この少女の家の田圃で、柿は庭先になったものだという。誰かがボールペンを、土産にあげていたが少女は、はづかしいのか、なかなか受け取ろうとしなかった。

この付近の山の傾斜部には、相当に高いところまで棚田が拓けており、その中間ぐらいのところに農家がある。このあたりが、標高2400メートルぐらいで、稲作の限界地点ではないか、と渡部先生が言っていた。もともとは焼畑で陸稲を作っていたが、後になって水田に発展したのであろうか、と思った。焼畑は今は、政府が禁止しているが、奥地に入ると内密にやっている人もいるらしい。

プナカノ町には予定よりも早く着いたので、飛び込みで農家を訪ねた。30歳ぐらいの娘（主人）と62歳になるという母親の二人が出てきて、快く迎えてくれた。この娘には二人の子供があり、ほかに同胞がいて全部で8人家族だという。田んぼの広さは、耕運機で一週間かけて耕す程度だという。ここでもティンブー近郊の農家の人と、同じ広さの表現である。夫はタクシーの運転手をしており、田植えと刈り入れの時は、タクシーは休む。それでも人手が足りないのので、何人か人を雇う。化学肥料は使わず、牛糞だけ、牛が7頭いた。乳を搾り、チーズやバターを作る。肉用ではないが、乳が出なくなると、殺して食べる。屠殺しバラスのは、自分たちはしないで、ネパール系の人にお金を払ってやってもらう。

ブータンの人は仏教心から動物を殺さない。八エでも殺さないというほどである。肉は屋根裏部屋で乾燥させ、保存食にする。中流以上の兼業農家である。日本という一種兼か、二種兼かについては、聞かなかった。



柿売りの少女

6パロの農家と西岡農場、国立農業機械センター

30日は待望のパロの町へ向かう。昨日来た道をティンブーまで戻り、そこから南に下がり、途中右折して北に向かうのである。ティンブーからパロまでは、2時間である。

プナカのホテルを出てすぐ、二人の女性が稲刈りをしていたので、みんなでそこへ行って、写真を撮ったり、みたり聞いたりする。昭和20年代の種子島の稲刈りと同じである。ただ、干すのに種子島では、前に刈った稲の根元に、次に刈った穂を次々にかけていくのであるが、ここの人たちは、そんなことはしないで、全部地べたに干す。乾季だから雨は降らないし、これでよいのだという。わたしもちょっとやってみたが、種子島の鎌よりも少し厚めのもので、柄の長さは、半分で短い。稲刈りだけに使うのであれば、この方がやりやすい。稲の背丈はかなり長い、株が小さい。収量ということにこだわっていないようだ。ここを出て、少し行ったところに今度は、老夫婦が脱穀をしていたので、そこに寄る。脱穀しているといっても脱穀機ではない。支え棒をして、足で稲の穂を揉んで脱穀するのである。ティンブーで見たような、束にしてたたきつけるのではない。なぜたかかないのかと聞いたら、たたくと籾が散らばるから駄目だという。老夫婦だからたたくのは、身体にこたえるのではないかと思った。

翌日の31日は、午前中二軒の農家を訪問して、いろいろ聞いたり、見たりした。午後は、西岡農場を訪ねた。ここでは、一軒の農家について述べ、必要によりもう一軒で聞いたことも、付加して記すことをことわっておきたい。

シュリアン・デンマ(女27歳)家訪問

家族はデンマさんの父母、夫、子供4人、それに夫の兄弟、従兄弟も同居しているとのことである。家は、祖父母の時代に建てたものだという。ブータンの農家の家は、柱でも鴨居でも太くて、しっかりしている。仏間以外は履物を脱がなくてもよいので、歩いて磨り減っている個所があちこちにある。板間には、相当に厚いものを使っている。

この家の作付面積は3エーカー、1町2反歩、中流どころである。パ口では、ちゃんと面積の単位で言う。ブータンで、いちばん農業の進んでいる地方だということが、これでもわかる。一番多く作っている人は、8エーカー、3町2反歩だそうである。夫は、パ口空港に勤める兼業農家である。作っている米は、4種類で白い米、西岡先生が持ってきたジャポニカ、ネパール米、それに赤の米である。赤の米が高く売れるが、自分はジャポニカが好きだという。理由を聞くと、収量がなくて、ねばねばしておいしい。日本人好みの味わい方だと思った。赤の米が高いのは、ブータン人の主食は、赤の米であるから、その理由はうなづける。米のほかに、りんご40本、野菜少々を作っており、これらは日曜日の市場に売りに行く。年間の収入は、母が担当しているからわからない。生活費は、年間30,000ヌルラム、日本円で75,000円だという。耕耘機が一台あった。荷台も着いていた。よくみるとクボタ製である。タイヤを左右逆につけていた。以前は、牛で田圃を起こしていた。今も牛も馬もいる。牛は、乳を搾ってバターやチーズを作る。馬は、荷物を運ぶのに使う。

自分は小学校5年でやめて、家の手伝いをしていたが15歳で結婚した。12歳の男の子を頭に4人の子どもがいる。夫は同じ村の人である。結婚式という習慣はないらしい。親戚、友人、知人を招いてご馳走をする、日本の披露宴だけである。種子島にもある「結い」の習慣について聞いてみたが、そういう習慣はないとのことである。あくまでもお金を払って人を雇う。3ヶ月前には、前金をはらって予約しておく。葬式でも行ったり来たりするが、招待が前提だという。ブータンは、女系社会で女の家に婿入りすることは、前に書いた。ただし現在では、女が男をもらうのと、男が女をもらうのは、半々になっていると、通訳が言っていた。またブータンは、一夫多妻の国であるが、そんなに簡単なものではないらしい。まず第一夫人の了解がなければ成立しない。それでは、第一夫人が了解するときは、どんなときであるかといえば、結婚して3年、5年経っても子どもができないとか、その他止むにやまれぬ事情があるときだという。現在の国王には、4人の妻がいて、10人の子どもがいるそうであるが、どんな事情があたのでしょうか、と通訳に聞いたら、4人とも姉妹だと言う。事情については知らないとの答えであった。政府は、一夫一妻を指導しているようであるが、国王に4人

の妻がいては、その効果はどんなものだろうか、と余計な心配をした。

この家には、家族のほかに夫の兄弟や従兄弟まで同居していることで、その事情を聞いてみたかったが、プライベートに深入りすると思って、やめにした。子どもの教育については、試験の成績が気になる。以前は、塾に通わせていたが、塾は政府が禁止した。日本の教育ママほどではないにしても、ブータンでも、似たようなことがあるのかと思い、ブータン社会の先行きを案ずることであった。子どもは家で生むのかと、誰かが聞いていたが、産婆さんがきて家で生むのだという。自分は、その産婆をしている。産婆のお金はもらわないが、国の税金を納めなくてもよい。また村の共同作業にも出なくてよい。この村は、ネンジョという。村長は、立候補して選挙で選ぶ。選挙権は、18歳以上の人。被選挙権の年齢を聞き忘れた。通訳によると以前は、村長のなり手がなかったけど、最近は、収入がよいので、なり手が多いということである。この村の戸数は、80戸で半分以上は農家で、あとは事務所に通う人、タクシーの運転手、店をやっている人もいる。

西岡農場・農業機械センター訪問

この農場は、正式にはブータン国立農場であるが、西岡京治さんが、1964年、海外技術協力事業団(現・国際協力事業団)から農業指導者として、ブータンへ派遣され、この農場の開設と発展に尽くしたということで、西岡農場としているいちの書物もあるので、私もそれに倣ったわけである。しかし、西岡さんは残念なことに1992年、「敗血症」にて現地の病院で逝去、享年59歳であった。1964年以来28年間、ブータンで暮らし、この国の農業指導に携わったのである。稲、野菜の作物指導だけでなく、ジュースや豆腐作り、田圃の整備や灌漑設備、さらにはつり橋の架橋指導というように、ブータンの農民、農村から頭が離れなかった。「西岡さんは、ブータンの言葉を覚え、民族服をきて農民と土にまみれた。(中略)国連をはじめ多くの国や機関がお金や開発事業の援助をしてくれるが、一人の人間として農民と交わったのは彼だけだ」と言うのは、西岡さんの生き方に共感し、農業を学ぶために千葉大学に留学したキンレイさんである(オリザの環、河北新報社、1996、P46)。

農場と機械センターは併設になっている。コンクリートの二階建てでもう一棟鉄骨建ての修理工場がある。二階の一室が事務所、その隣に広い部屋があったが、今は使われていない。一階の一室は、旋盤、切断などをする大型の工作機械が置いてあり、鍬とか鎌や鋤、耕耘機の付属品などを作る工場である。隅のほうに、日本から持ってきた足踏み縄ない機、足踏み脱穀機、この工場で作った牛耕用の鋤などが置いてあった。隣の部屋は、西岡さんの生前、りんごジュースや豆腐などを作っていた食品工場であったらしいが、今はやってい

ない。別棟の修理工場では、耕耘機のエンジンの修理をやっていた。どこ製かと聞いたら、インドだという。若い一人が日本語を話せる。何年前かに8ヶ月あまり日本に研修に行ったと言い、親しみ深く話してきた。

屋外には、荷台をつけた耕耘機が10台ばかり並べられている。自走式の脱穀機も1台あった。希望により農家に貸すのだという。これはみな日本政府の援助によるものである。値段が高いので、農家にはあまり普及していないらしい。

建物の周囲は、農場である。キャベツ、大根、にんじんなどが植えてある。チャイニズキャベツも植えている、と案内の人が盛んに言うので、どんな野菜なのかと興味深げに行ってみたら、日本でいう白菜であった。現在この野菜は、全部種子採り用で、野菜としては売っていないという。種子は、農家に頒布している。少し下ったところに田圃もある。指導田圃で、ここで日本式の植え方、刈り取りなどを、指導したのだという。

7 ブータンの冠婚葬祭

ブータンの国が、女系社会であるとか、結婚については、式はしないで披露宴だけで済ますとか、一夫多妻の国であるとか、についてはこれまで随所に書いたので、ここでは、葬祭について述べる。この部分は、夕食前に通訳をつかまえて、ホテルのロビーで質問して聞いたものである。

葬式は、あまり飾り立てはしないが、盛大に行う。全て火葬にするが、これは、国で場所が決められている。雪などで道路状況が悪ければ、村長が指定した、川原などで焼く。遺骨はこなごなにして遺灰といっしょに粘土に混ぜ合わせ、団子状にして、チョルテン(仏塔)の軒下に置くとか、それらしい場所たとえば岩陰などに置く。この場所は、僧侶がアドバイスするのだという。遺骨や遺灰は、川に流す人もいるが、粘土と固めた団子状のもの(チャチャという)は、インドのガンジス川までもって行って流さなければいけない。雨に打たれ、風にさらされて結局大地に還るとの思想である。

したがって、墓を建てる風習はなく、またチャチャを置いた場所に行ってお詣りをするのもしない。肉親が死ぬと、ブータンほど悲しむ国はないといわれるほどであるが、祖先崇拜の信仰はない。信仰は、あくまで仏教(ラマ教)である。初七日、二週忌、三週忌、四十九日、一年忌と法要をするが、法事は一年忌で終わりである。種子島の神道でも同じような祭りをするのであるが、これは仏教から来たやり方で、その仏教はインド、チベットに由来するのである。信仰のことを言ったついでに触れておくと、ブータンでは、山は聖なる場所という思想があって、登山はしない。ヒマラヤ登山隊も全部、隣のネパールからである。幽霊が出るとか、

それが乗り移るといった観念もあるという。ここらへんのこと聞きかたかったが、少し専門的になるので、聞くのはやめにした。

8 おわりに

今回は、西ブータンの主として農村めぐりであった。ここは仏教の国で、多数の寺院と僧侶がおられることで有名である。老境を迎えると、こうした寺にこもって死の準備をする人たちもいるそうであるが、お寺めぐりをしなかったことが、少し残念であった。

空、山、棚田、建物の美しいのに感動した。特に丘の上から眺める棚田、標高2000メートル以上の山の尾根に沿って拓かれた棚田と農家の点在する光景は、すばらしかった。

ブータンは、全戸数の95%が農家で自給自足の国である。全国民の生活を農家並みの水準にあげたい、というのが国王の願らしい。これは、日本とはまったく対照的である。ブータンも近代化に向かっては確かであるが、それを急いでいない、慎重である、との実感を持った。農業を軽視し、工業を優先するという近代化を急いだあまり、物心両面の良さを失いつつある、いや失ってしまったと言ってよいであろう日本と、これまた対照的だといえる。今回は、通り一遍の、ただブータンの農村の一部に触ってみるという旅であったが、次回は、1ヶ月ぐらい農家に泊めてもらい、農家の手伝いをしながら、もっと詳しく、深く見てみたいと思う。特に私の関心は、農業のやり方や農作業そのものはもちろんであるが、生活習慣、村の行事、人間関係、冠婚葬祭等々について、体験的に見せてもらいたい、と思いつつ日本に帰ってきた。

参考文献

1. 地球の歩き方編集室『地球の歩き方105-ブータン』、ダイヤモンド社、2000
2. 河北新報社取材班『オリザの環』、日本評論社、1998
3. 後藤多聞『遙かなるブータン』、筑摩書房、1995
4. 西岡京二・里子『ブータン-神秘の王国-』、NTT出版、1998

稲刈り風景

